

令和俳句論考

百瀬 初江

汀女忌や絵本の角にぶつけ皺
生れたる蜻蛉に水の匂ひかな

河原地英武

(第三句集「虫壳」より)

本書は作者が主宰する「伊吹嶺俳句叢書」第一篇となる句集である。主宰としての意欲に満ちた句が綺羅星の如く並んでいる。

一句目、幼子が喜んで持ち歩いているうちにぶつけたのか、角に皺ができていた。それを見て思わず、子への愛情に満ちた純真で大らかな汀女の句が浮かんだのであろう。何度も繰り返し読んだであろう絵本には、秋の気配を感じる。見事な忌日俳句である。句集には他にも多くの忌日俳句があり、先人方への敬意を感じる。

二句目、夏の日の未明、ヤゴは水中から出て来る。時間をかけた蜻蛉の羽化が始まる。生まれたての蜻蛉の皺だらけの翅。柔らかで濡れたような身体。徐々に翅を広げていく蜻蛉の姿に、神秘的な生命の水の匂いを感じたのだ。本句集は「円筒の埴輪の底に子守蜘蛛」など、細やかな観察眼で小さな命を詠んだ句が際立つ。氏は「伊吹嶺」主宰

手の窪といふ容れものや竜の玉
匍匐前進げじげじの秋日和

高橋 可子

(第二句集「手の窪」より)

一句目、庭先でよく目にする竜の髯は初秋に実をつける。そし

てその玉は初冬に碧く輝く。作者は宝石をしまうように、「手の窪といふ容れもの」にそつと竜の玉を入れた。手の窪に包まれた竜の玉はさらに美しさを増す。日々の小さな輝きを掬い上げる作者の生き様。その象徴たる手の窪は限りなく優しく温かい。

二句目、秋晴の穏やかな日、げじげじが匍匐前進している姿を目にした作者。小さな虫が必死に前進している姿に、愛おしい気持ちに湧いてきたのだ。自分も懸命に齢を重ねてきたことが脳裏に浮かび、げじげじを応援したくなつたのかもしれない。掲句と同じ章にある「とどまれば卒寿歩けば花の昼」の句。作者は卒寿を迎えられた。歩く作者の前には、桜咲く春が見える。

氏は「南風」同人

中川 純一

講義棟蝦夷春蟬のともとして
尾白鷺雪搔く我を見降ろしぬ

(第二句集「雪道の交叉」より)

あとがきによれば、作者は会社勤めの後、東京農業大学のオホーツクキャンパスで教員として十一年間過ごしている。北海道の大自然に抱かれた作者の心豊かな日々を飾らない句に読み込んだ句集である。一句目、蝦夷春蟬は全国に分布しているが、北海道では、五月初旬から低い土地でも鳴き出す。大学の講義棟でも春蟬の大合唱が始まった。新緑のキャンパスに蟬の鳴き声がこだまする。「ともとして」という古語が効果的に使われている。蟬の声とともに、活気あふれる学生たちの声も聞こえてきそうである。

二句目、北海道で越冬する天然記念物の尾白鷺も、この町では身近な存在だ。辺り一面が雪で覆われる北の大地。尾白鷺の目に映るのは、すべてを覆いつくす広大な雪景色とその中で懸命に雪

搔きに精を出している作者である。視点の転換が巧みである。

氏は「知音」副代表

一輪の梅咲く庭や往診す
鶴来る空に標識ありしごと

角田 和之

(第一句集『望郷』より)

「葉桜や余生も医療励みたし」と詠む作者は、長年地域医療に尽力されている方である。一句目、早春の日、往診に來た作者は、ふと庭の梅の木に咲く一輪の花を見つけた。冬の間も何度か訪れている患者の家であろうか、寒さに耐え咲いた一輪の梅は明るい春の訪れを予感させる。一輪の梅の花は希望である。患者の回復を信じ、真摯に病に向き合う医師の姿が見える。

作者は長崎県佐世保市生まれ、鹿児島大学医学部で学ばれている。鹿児島県出水市を飛び立った鶴は佐世保上空に現れるそうだ。二句目には、毎年迷うことなく訪れる鶴に対する畏敬が感じられる。ふるさとを象徴する鶴の飛来は、その地で生きる人々にとって大きな誇りである。動物の持つ本能、確かに生を全うしている姿を「空に標識ありしごと」と巧みな比喩で表現している。

氏は「ランブル」同人

悠久を掴みてをりし蟬の殻
一目つつ母となる日へ毛糸編む

荒井 寿一

(第一句集『麒麟』より)

一句目、作者の目に留まったのは、枝にしがみ付いている蟬の抜け殻である。殻を破って飛び立った蟬は生を謳歌しているだろう。地上に出てからの蟬の一生は短い。その命は繋がれていく。蟬の殻の足が掴んでいるのは悠久の命の繋がりである。冬になっても

朽ちることはない蟬の殻に、心を寄せる作者の独自の感性が光る。父親にとつて、嫁いだ娘が母となることは、この上ない喜びである。二句目、出産のため里帰りしている娘が、生まれてくる子のため、一目一目、丁寧に編み物をしている。その幸せそうな笑顔に父である作者も心豊かになるのだ。そして、句を読む者も幸せを分けて貰えたような温かな気持ちになる。娘とやがて生まれてくる子への慈愛に満ちた句である。

氏は「松の花」竜紋集同人

オホーツクの町の光れる驟雨かな
列車行く野に畦道に野紺菊

尾崎 淳子

(第一句集『星置川』より)

北海道北東部に位置し、海に面した町に驟雨が降っている。一句目はそんなふるさと町の風景である。突然降り出した雨。雨粒の一つ一つが、光を放ちながら町を濡らしていく。濡れた町は、艶めき色を変えていく。町の向こうに見えるオホーツク海もきらめきを増し、より青く美しくなるのだ。驟雨の光を捉える作者の目は細やかで、雨の町を豊かに表現している。

二句目、野紺菊は、道端でよく見かける白や紫などの可憐な花である。広大な平野を走り抜ける列車。線路際に咲く野紺菊は、列車が通る度に揺れ、地味だがけなげに咲く野紺菊は野を彩る。懐かしさと愛着を感じる風景である。作者は版画家であり、日本画家である。装丁・装画は作者自身の作品であり、掲句は、そこに描かれた青い道に咲く野紺菊を思わせる。

氏は「青麗」鷹」会員

(筆者住所 〒300-0815 土浦市中高津二一六五)